

Ⅱ 西原 F 遺跡 3

本文目次

一 遺跡の位置と石材環境	1
二 調査の概要	2
1. 調査の目的と経過	2
2. 層序	2
3. 遺物の出土状況	5
4. 遺物の概要	8
三 まとめ	14

挿図目次

第1図 阿蘇周辺の旧石器時代石材利用図	1
第2図 土層断面図	3～4
第3図 出土遺物分布・接合遺物実測図	6～7
第4図 III層出土遺物分布図及び実測図	10
第5図 IV a層出土遺物分布図及び実測図	10
第6図 IV b層出土遺物分布図及び実測図	11
第7図 V層出土遺物分布図及び実測図	11
第8図 VII・VIII層出土遺物分布図及び実測図	12
第9図 表採遺物実測図	12

図版目次

図版1
上 土層堆積状況
中 完掘状況
下 A T下層の礫群
図版2
上 遺物出土状況
中 接合遺物
下 出土・採集遺物

表目次

第1表 遺物観察表	13
-----------	----

例言

○本編は熊本県阿蘇郡西原村大字河原字大野に所在する西原F遺跡の第3次発掘調査の概要報告である。

○調査は、熊本大学考古学研究室が1998年8月21日～8月27日までの7日間おこなった。

○調査及び整理担当者は以下の通りである。

甲元真之 木下尚子 小畑弘己 杉井健（以上教官）

大坪志子 松嶋木綿子（以上熊本大学埋蔵文化財調査室）

藤木聡 村崎孝宏（以上大学院1年次生）山崎常美（研究生）

上山敏弘 江島賢一 小路岳彦 福岡理恵 藤本圭司（以上学部4年次生）石川まどか 亀井菜津子 新里充人 富永明子

中川毅人 古野京子 峯崎麻帆 村上浩明 山口大介（以上学部3年次生）荒木隆宏 河合章行 木村龍生 熊本茂仁 竹中克繁

橋口剛士 丸山愛 劉軍（以上学部2年次生）林充彦（山口大学4年次生）宮崎拓（別府大学3年次生）片桐信人（熊本学園大学3年次生）

○調査・整理については、以下の諸氏・機関に御協力・御指導いただいた。（五十音順、敬称略）

小谷桂太郎（西原村教育委員会）岩谷史記 岡本真也 濱田智美 宮崎敬士（以上熊本県教育委員会）稲津暢洋 山下宗親

（以上熊本市教育委員会）伊藤昌広 杉原敏之 吉留秀敏（以上福岡県旧石器文化研究会）若杉竜太（大分県教育委員会）

西山由美子（大牟田市教育委員会）松本建設 西原村教育委員会 西原村文化財教室 家畜改良事業団熊本種雄牛センター

○遺物の実測は整理担当の学生が各自おこなった。製図は遺物を古野が、その他の挿図を活水、峯崎、橋口、河合がおこなった。また山下実氏には採集遺物を提供していただいた。

○本編の編集は藤木がおこない、執筆者名は各文末に記した。

一 遺跡の位置と石材環境

西原F遺跡は、阿蘇外輪山南西部に位置する高畑山（標高796m）から西にのびた、幅狭な尾根上（標高534m）に立地する。尾根の南北には谷が入り、河川が西走する。現在、遺跡周辺は牧草地として拓かれ、西原A・B遺跡など多くの旧石器時代遺跡が発見されている。同様に阿蘇外輪山上には数多くの旧石器時代遺跡が点在し⁽¹⁾、その石材利用のあり方は地域によって微妙に異なっている。

ナイフ形石器文化期では、①大野川流域産とされる流紋岩主体の地域、②小国産の気泡の入る黒曜石を使用する地域、③西原F遺跡を含む、球磨川・緑川流域産チャートを使用する地域、④茶褐色を呈する風化の著しい黒曜石を使用する地域に大別され、西北九州産黒曜石がそれらを包括するように全体的に広く利用される（第1図A）。特に④は阿蘇外輪山周辺に水源を持つ河川流域に散在し、外輪山北麓の象ヶ鼻周辺で卓越することは注目できる。

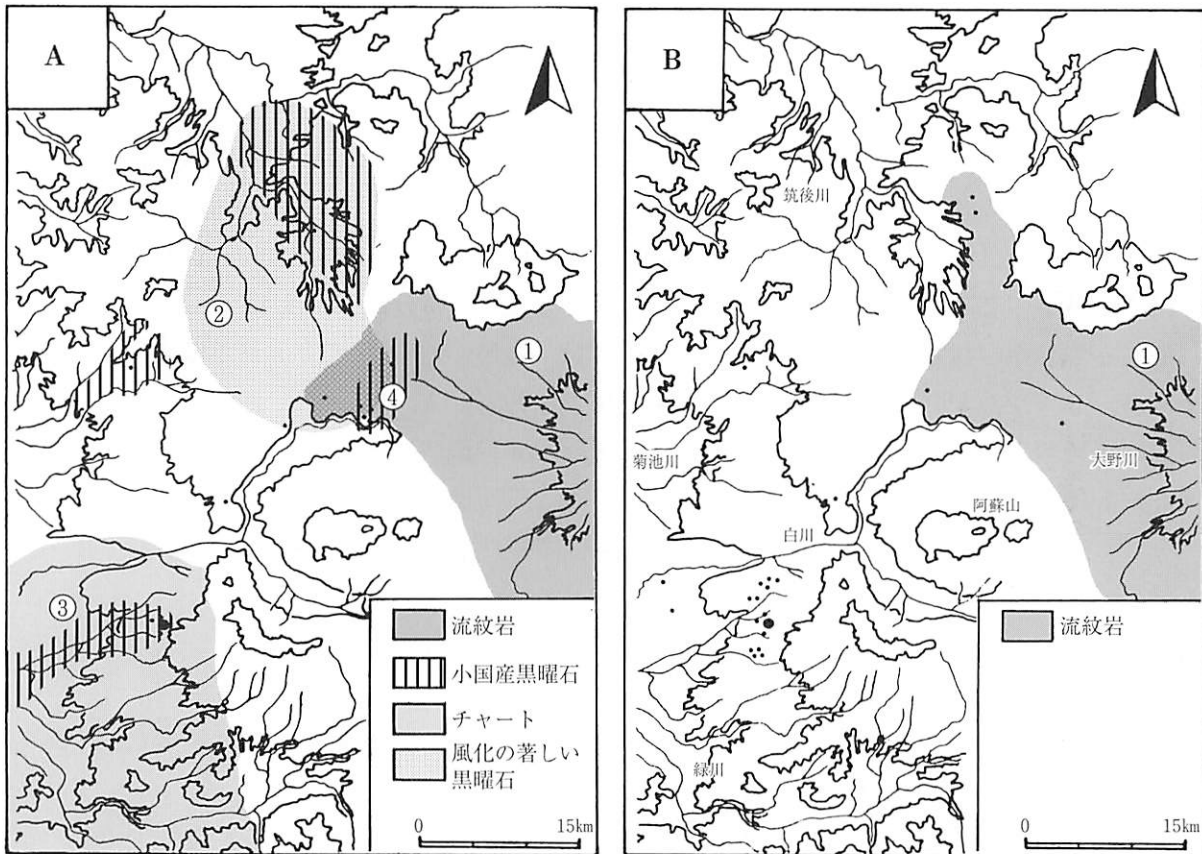
細石刃文化期では、流紋岩を石器石材に利用する地域以外は、西北九州産の黒曜石を多用する（第1図B）。当該期に西北九州産黒曜石を石材に多用するあり方は、広く九州脊梁山脈西側で認められ、本地域も例外でない。（橋口）

遺跡の位置

ナイフ形石器文化期の石材環境

細石刃文化期の石材環境

註（1）阿蘇狩人の会「阿蘇周辺地域における旧石器文化新資料の紹介（その1）」肥後考古学会編『肥後考古』11 1998年。
小畑弘己編『象ヶ鼻D遺跡』 1998年。
木崎康弘ほか「遺跡の概要」肥後考古学会編『肥後考古』5 1985年。ほか



第1図 阿蘇周辺の旧石器時代石材利用図

二 調査の概要

1. 調査の目的と経過

第1・2次
調査の成果

第1・2次調査ではI～Xの堆積層の中に第1～6文化層を確認した。その中で、阿蘇周辺で百花台型台形石器が多数出土し、層位的にナイフ形石器文化期終末に位置づけられたこと、始良丹沢火山灰(AT)下位から台形様石器を含む石器群を確認したことは注目できる。しかし、短期間の調査であったため、効率的にグリッド設定をしたものの各グリッドの完掘状況にばらつきがあった。今回はその点を踏まえ、①遺跡全体の遺物包含状況および土層堆積の把握、②掘り下げ途中のグリッドのIVb層までの完掘を主目的として調査に入った。

第3次調査
の目的と
経過

調査は、遺跡の南への広がりを確認するため、A・B-1グリッドを新たに設定した。C-1、G-4～6、H-10グリッドでは深掘りし、層の堆積と遺物包含状況の確認をおこなった。IVb層まで完掘したグリッドは、A・B-1、C-1・2、F-5・6(北半)、G-1・4～6、G-2(南半)、H-8・10、J・K-1である(第6図)。調査区全体としては遺物の分布に疎密があり、G-4～6グリッド周辺に集中する。またF-5・6グリッドAT下位のVIIa層中に、径1～2mm大の炭化物の集中がみられ、礫が3点伴う(第8図)。G-6グリッド北側の深掘りトレンチにおいても同層中から礫が出土しており、G-6グリッド周辺のVIIa層中に礫群の存在が推測される。

礫群

遺物整理

今回の調査では接合資料も多くみられ、第1～3次調査を通じての個体別資料の詳細な検討が目指された。

調査面積

なお、今回の調査面積は55m²である。(峯崎)

2. 層序(第2図)

層序を第1・2次調査でI～X層上部まで確認した。今回更に掘り下げた結果、H-10グリッドでXI層までを確認した。

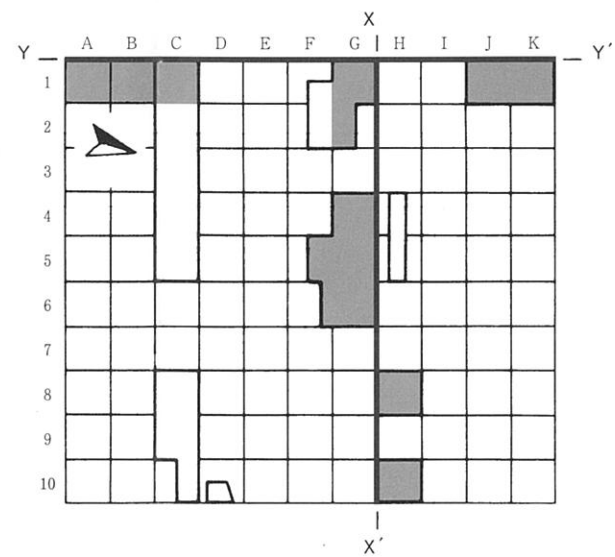
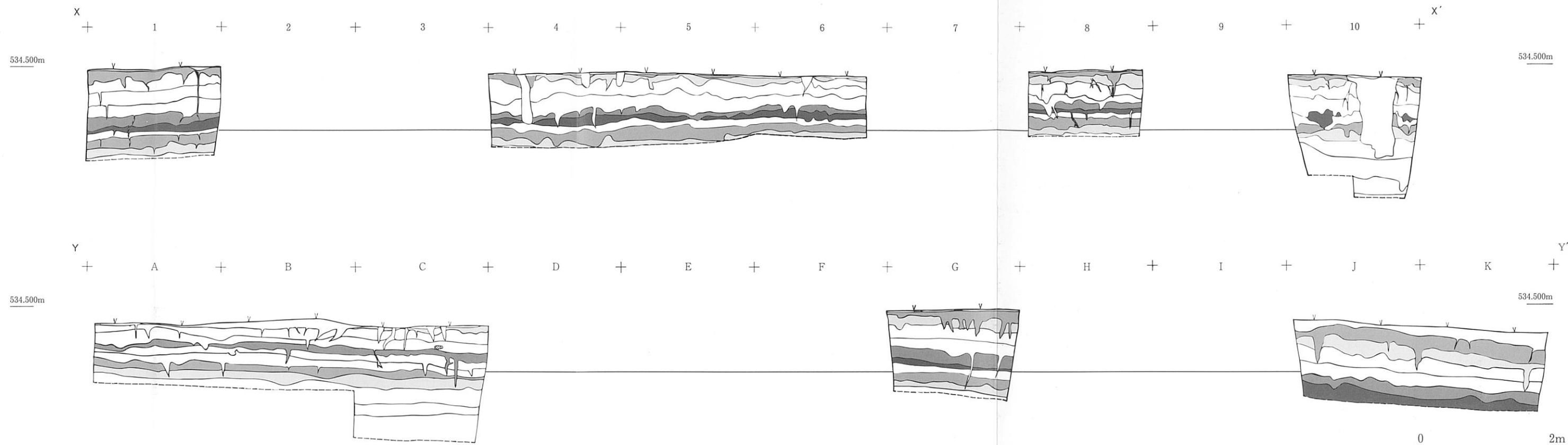
傾斜堆積

遺跡の層序を概観すると、以下のことがわかる。①A・B-1、C-1～5グリッドはIII層上部まで削平される、②南北ライン上では、G-1グリッド付近から北に向かって各層が次第に厚さを増しながら堆積する、③東西ライン上では、各層がG-1グリッドで厚く、G-4～6・H-8グリッドで薄い。①～③から、調査区の旧地形はA・B-1、C-1～5グリッド付近を尾根の頂部とし、調査区北東側に向かって緩やかに傾斜していたとわかる。また、調査区北東部には浅い谷が入っていたと推定され、II層以下をよく残している。

旧地形

なお、土色は『新版標準土色帖』(日本色研事業株式会社)による。

- I 層：表土。アカホヤ火山灰(Ah)のブロック、縄文時代早期以降の遺物を含む。土にしまりがなく粒子が細かい。丘陵削平時の攪乱層。
- II 層：黒褐色土層(7.5YR3/2) 粒子は細かく、粘性がある。縄文時代早期後半の遺物を包含する。まばらに炭化物を混入する。
- III 層：にぶい黄褐色土層(10YR4/3) 固くしまり、クラックが発達する。II層とIII層の漸移層であり、層厚10～15cm。細石刃石器群を含む。



□ : 第1・2次調査区
 ■ : 第3次調査区
 X-X' : 東西ライン
 Y-Y' : 南北ライン

- | | |
|------------------------------|------------------------------|
| I 層 □ : 表土 | VI 層 □ : 暗褐色土層 (7.5YR3/3) |
| II 層 ■ : 黒褐色土層 (7.5YR3/2) | VII a 層 ■ : 黒褐色土層 (7.5YR2/2) |
| III 層 □ : にぶい黄褐色土層 (10YR4/3) | VII b 層 □ : 暗褐色土層 (7.5YR3/3) |
| IV a 層 □ : 褐色土層 (10YR4/4) | VIII 層 □ : 褐色土層 (10YR4/6) |
| IV b 層 □ : 褐色土層 (10YR4/6) | IX 層 □ : 褐色土層 (7.5YR4/4) |
| V a 層 ■ : 暗褐色土層 (10YR3/4) | X 層 □ : 褐色土層 (7.5YR4/6) |
| V b 層 ■ : 黒褐色土層 (10YR2/2) | XI 層 □ : 明赤褐色土層 (5YR5/8) |

第2図 土層断面図

- IV a 層：褐色土層（10Y R 4/4） 固くしまり、クラックが著しく発達する。層厚20～30cm。B-1グリッド付近で層厚が薄い。台形石器群、ナイフ形石器を含む。
- IV b 層：褐色土層（10Y R 4/6） 層厚20～30cm。IV a 層と同じくB-1グリッド付近で層厚が薄い。ナイフ形石器、台形様石器を含む。
- V a 層：暗褐色土層（10Y R 3/4） 粘性があり、固くしまる。クラックが発達する。層厚10～20cm。ナイフ形石器を含む。
- V b 層：黒褐色土層（10Y R 2/2） V a 層よりも粘性があり、固くしまる。V a 層に比べ色調が暗い。層厚10～15cm。
- VI 層：暗褐色土層（7.5Y R 3/3） 白い火山ガラス（AT）を多く含む。層厚10～15cm。
- VII a 層：黒褐色土層（7.5Y R 2/2） 粘性があり、径5～10mmの軟質の小礫を含む。層厚10～15cm。台形様石器を含む。
- VII b 層：暗褐色土層（7.5Y R 3/3） 固くしまる。層厚10～20cm。
- VIII 層：褐色土層（10Y R 4/6） 径1～5mmの軟質の小礫を含む。層厚20～25cm。台形様石器を含む。
- IX 層：褐色土層（7.5Y R 4/4） 粘性がなく、粒子が粗い。層厚30～35cm。
- X 層：褐色土層（7.5Y R 4/6） 中間に礫をはさむ。下部はやや赤味を増す。層厚20～25cm。
- XI 層：明赤褐色土層（5Y R 5/8） 粘性がなく、粒子が粗い。層厚は不明。（峯崎）

3. 遺物の出土状況

今回の調査で出土した遺物は総数237点で、その内訳は土器3点、石器223点、礫11点である。土器はすべてクラック内出土で、原位置をとどめていない。

出土石器の内容は、碎片114点、剥片64点、石核2点、製品7点である。III層からは碎片7点、剥片3点、スポール1点が、IV a 層からは碎片65点、剥片24点、尖頭器1点、台形石器1点が、IV b 層からは碎片30点、剥片24点、石核2点、ナイフ形石器2点、台形石器1点が、V a・b 層からは碎片7点、剥片8点が、AT下位のVII・VIII層からは碎片5点、剥片5点、台形様石器1点がそれぞれ出土した。

石器の出土
状況

今回の調査までに出土した石器総数981点のうち、出土位置がわかりI・II層、クラック内出土のものを除いた680点の出土状況を第3図に示し¹⁾、それを各層ごとに分けたものを第4～8図に示す。

接合関係は11例あり、剥片剥離に伴う5例のうち4例は直径2mの範囲内におさまる。複数層にまたがる接合が3例あることから（第3表）、前回仮定した第1～6文化層とは異なり、自然層を越えた文化層の存在が推定される。

接合

III層（第4図）ではC-3～5グリッドに黒曜石・安山岩製石器の集中がある。またG-4～6、F-5・6グリッドにも遺物の出土がみられ、石材の偏りは特にはない。H-8・10グリッドでは、黒曜石製石器が多い。

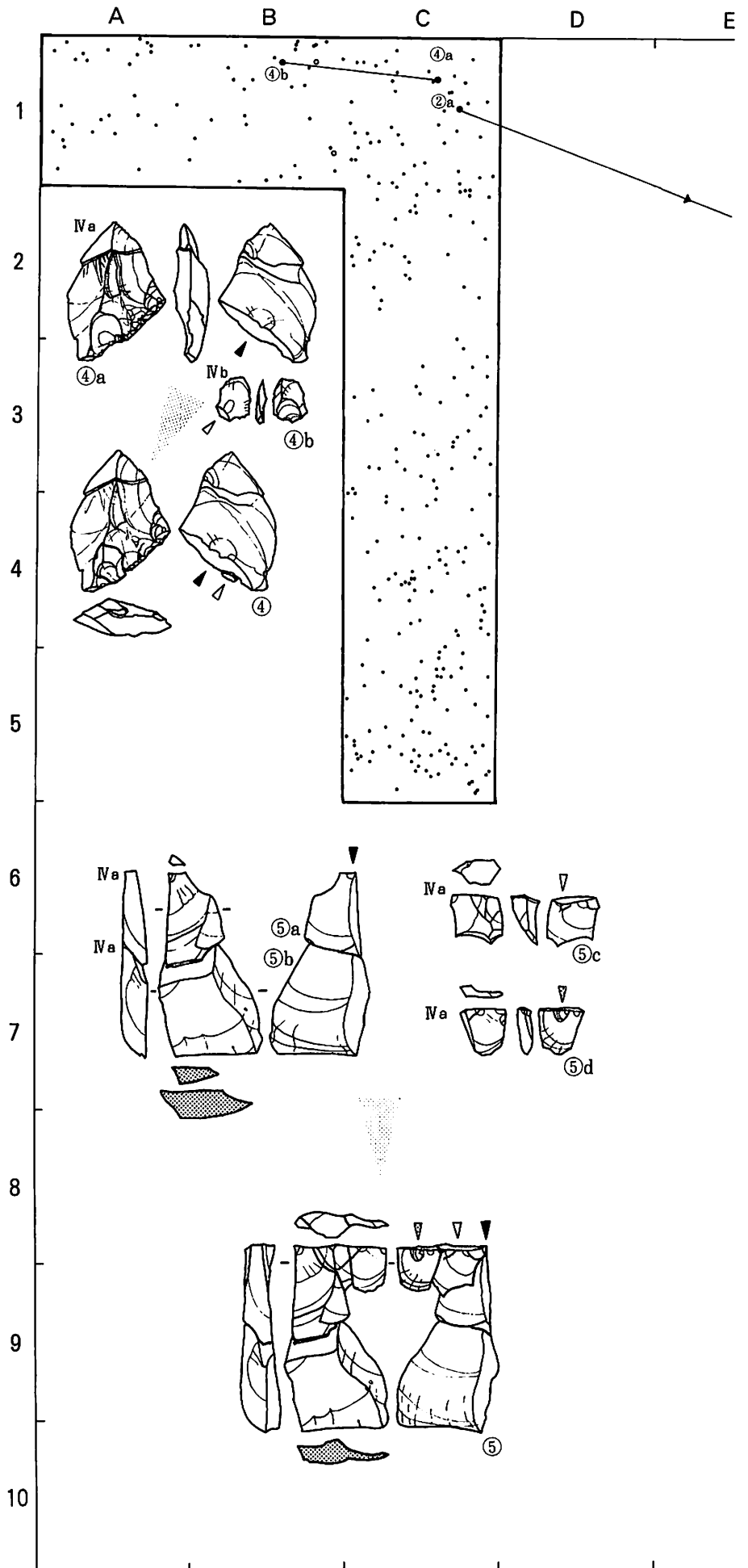
III層出土の
石器

IV a 層（第5図）になるとG-4・5、F-5、H-8グリッドの遺物が増える。G-4・5、F-5グリッドは緑色チャートが多い。IV a～IV b層にわたっては、A・B・C-1グリッドに風化の著しい黒曜石と透明感のある漆黒色黒曜石、H-8グリッドに白い縞の入る安山岩製石器が集中する。H-10グリッドでは、サヌカイト製石器が多い。

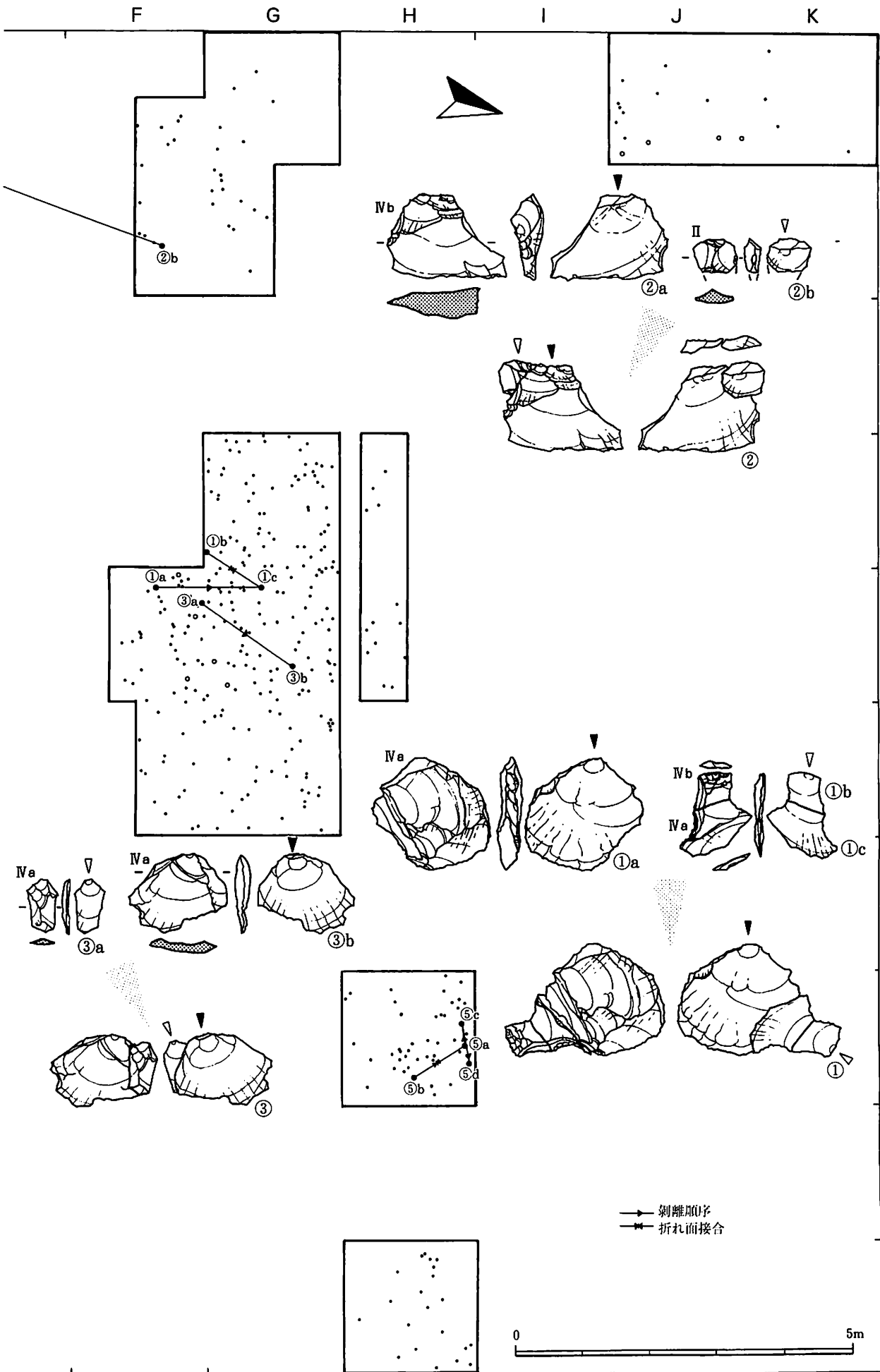
IV a層出土
の石器

・：第1～3次調査の
Ⅲ～Ⅳ層中出土石器

○：同礫



第3図
出土遺物分布・接合遺物実測図
(遺物S=2/3)



IV b層出土の石器 IV b層（第6図）では遺物は減少する。遺物の集中はA・B-1、C-1・2、H-10、J-1グリッドに移行し、IV a層までの遺物集中とは異なる様相を示す。A・B-1、C-1・2グリッドに石材の偏りは目立たないものの、IV a～IV b層にわたる黒曜石製石器、黒い節理の走る白色チャート製石器のIV b～V層にわたる集中がある。またH-10グリッドには光沢のない黒曜石製石器が多い。

V層出土の石器 V a・V b層（第7図）になると遺物はさらに減少し、その大半は調査区の南西側に限られて分布する。

VII・VIII層出土の石器 AT下位のVII・VIII層（第8図）になると石材は黒曜石の占める割合が高い。C-1・2、G-2グリッドVII層に風化の著しい黒曜石製石器がみられる。VIII層中出土石器はH-8グリッドの漆黒色黒曜石製の台形様石器のみである。

AT下位の礫群 またF-5・6グリッドVII層中から礫群が出土した。これらは未掘部分にも広がる可能性があり、今回は記録のみにとどめ取り上げていない（第8図）。

文化層 以上、遺物出土状況を石材との関係で層ごとに概観した。遺物は、旧地形との対応で考えると、浅い谷部に少なく、平坦面に散漫に分布する。この分布のあり方は、谷部に遺物の流入した可能性が低いことを示し、遺物は原位置をとどめていると言えよう。また第2次調査で確認したII層および接合資料を含む個別別資料の平面・垂直位置の分布から、II層、III層、IV a層上部、IV a層下部とIV b層上部、IV b層下部とV層、AT下位のVII・VIII層にまとまる6つの文化層を想定できる。今回は自然層での把握にとどめたが、上述した想定の確認を今後の課題としたい。（富永）

註（1）II層出土石器のうち、接合によって本来IV層中にあったと推定されるものに限っては、分布図に示した（第3図②b）。

4. 遺物の概要

接合資料（第3図）

接合資料①白斑の入る黒色チャート製（a：IV a、b：IV b、c：IV a）

aを剥離したのち、b+cを剥離する（a→b→c）。剥片剥離は同一作業面上でおこなう。同一母岩資料に製品がなく、目的剥片の形状は明確でない。b+cは腹面側より折損する。

接合資料②：白色頁岩製（a：IV b、b：II）

aを剥離したのち、bを剥離する（a→b）。打面は平坦無調整で、剥離に先立ち作業面調整をおこなう。打角は60度と急である。aは左側縁に2回、右側縁にノッチ状の調整を施され、台形様石器となる。

接合資料③：白色チャート製（a：IV a、b：IV a）

aを剥離したのち、bを剥離する（a→b）。同一打面より連続して剥片剥離をおこなう。同一母岩資料にbと形態の類似する剥片があり、目的剥片は不定形横広のものと推定できる。

接合資料④：黒い節理の走る白色チャート製（a：IV a、b：IV b）

bは二通りに解釈できる。①a剥離時の作業面調整剥片（b→a）、②aを今峠型ナイフ形石器とすれば、基部の調整剥片（a→b）。

接合資料⑤：白い縞の入る安山岩製（a：IV a、b：IV a、c：IV a、d：IV a）

a+b、c、dの順で剥離する（a+b→c→d）。平坦打面より連続して縦長剥片剥離をお

こなう。石の節理方向と、a + bの側縁の折れ面は同一方向である。

出土遺物（第4～8図）

1は青灰色黒曜石製のスポールである。表面左はブランクの分割面にあたる。その分割面から調整し、スポール剥出をおこなう。下端部を欠損する。

Ⅲ層出土の
石器

2は漆黒色黒曜石製の台形石器である。腹面側からの調整により角状の張り出しを作出する。

Ⅳa層出土の
石器

3は緑色チャート製の尖頭器である。基部を大きく欠損し、全形は不明。両側縁を腹面側・稜上から粗く調整し、先端の尖鋭化を図る。背面には礫面を残す。

4はやや茶色味のある黒色黒曜石製の台形石器である。表面には対極方向からの小剥離痕がある。素材剥片を横位に用い、打面・末端部両側に腹面よりブランディングを施す。特に末端側は浅くノッチ状になる。5は安山岩製のナイフ形石器である。基部に腹面側よりブランディングを施す。先端・基部を欠損する。6は黒色チャート製で礫面を多く残す石核である。頻繁に打面転移を繰り返した結果サイコロ状になる。パンチ痕が数カ所に観察できる。7は青灰色黒曜石製の石核で円礫面を残す。打面と作業面を入れ替えながら不定形剥片の剥離をおこなう。残核の打面部は線状になる。8はシルト質頁岩製のナイフ形石器である。幅広剥片を素材とし、両側縁の基部に腹面側から調整を施し、左側縁は浅いノッチ状になる。右側縁先端部は背面より調整を施す。以上の特徴より「中原型ナイフ形石器」であろう。先端部を欠損する。

Ⅳb層出土の
石器

9は白色チャート製の不定形剥片である。右側縁を欠損する。

Ⅴ層出土の
石器

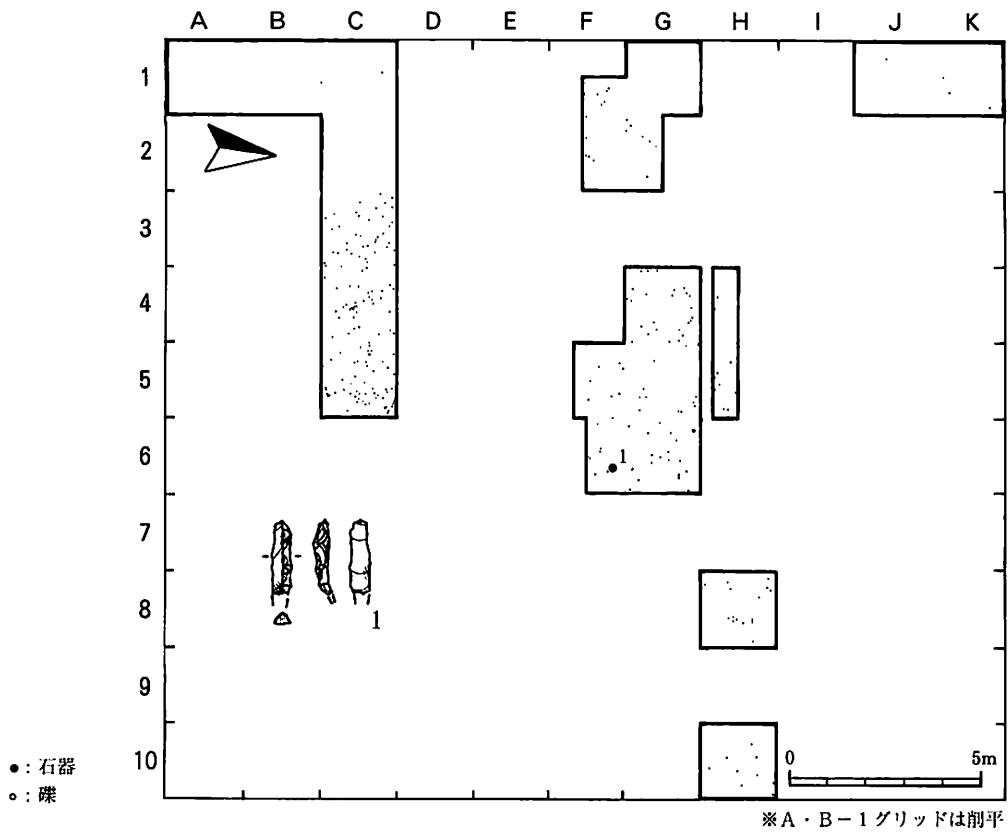
10は漆黒色黒曜石製の使用痕のある剥片である。左側縁に微細剥離がある。打点は残っておらず折損したと思われる。11は漆黒色黒曜石製の剥片である。剥片剥離の際、頭部調整をおこなう。末端は欠損する。12は風化の著しい黒曜石製で厚みのある不定形剥片を素材とする。右側縁腹面側に平坦剥離を施す。先端部を折損する。13は漆黒色黒曜石製の台形様石器である。平坦な打面から剥離された不定形剥片を横位に用いる。両側縁ともに背面側より調整を施し、左側縁は打面を除去して直線状、右側縁はノッチ状をなす。刃部に微細剥離がある。

Ⅶ・Ⅷ層出土の
石器

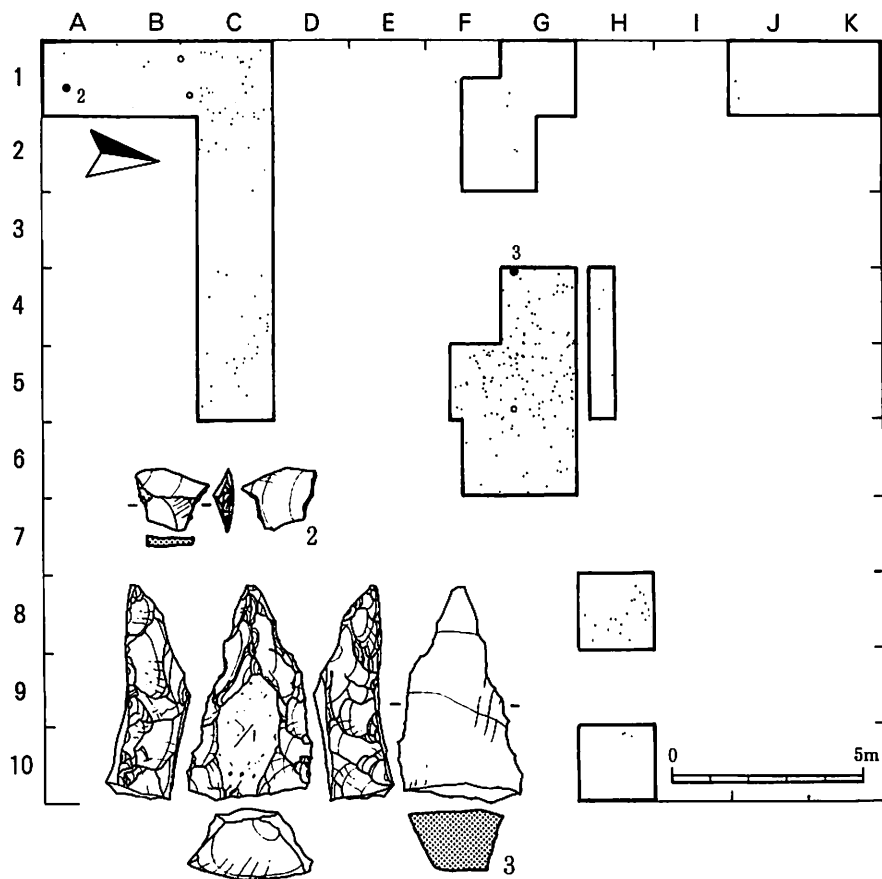
表面採集遺物（第9図）

16は漆黒色黒曜石製の台形石器である。素材剥片を横位に用い、打面側を腹面から、末端部を背面からノッチ状に調整する。17は漆黒色黒曜石製のもので腹面より調整を施す。先端・基部とも欠損しており、全形は不明である。調整の特徴や素材剥片の用い方からナイフ形石器であろう。18は漆黒色黒曜石製のエンドスクレイパーである。石刃端部に腹面側より急角度の調整を施す。両側縁に微細剥離が連続する。上端部を欠損する。19は山下実氏採集のナイフ形石器である。風化の著しい黒曜石の不定形剥片を素材とする。右側縁は、切断ののち腹面より調整し、背面に調整面から平坦剥離を施す。左側縁を大きく欠損する。20はサヌカイト製である。礫打面より剥離され、バルブが著しく発達する。底面に調整を施す⁽¹⁾。21は緑色チャート製の剥片である。背面の観察から、本剥片剥離以前に上下両方向からの小石刃剥離があったとわかる。それらの剥離角は鈍く、本剥片は作業面再生に伴うものであろう。（古野）

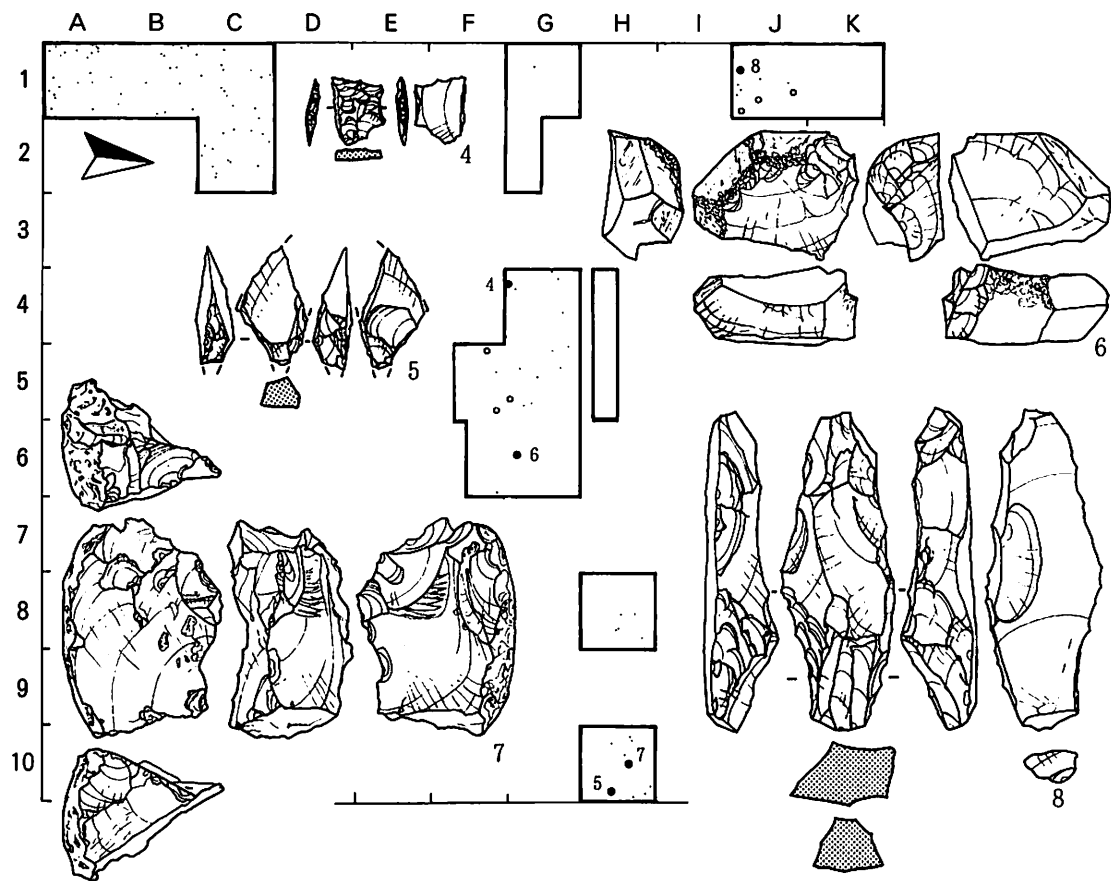
註（1）本剥片は一見すると瀬戸内技法による翼状剥片に類似する。個体別資料分析の結果、同一個体資料は、Ⅱ層中出土のものおよび表採遺物にあった。したがって現時点では積極的に瀬戸内技法によるものとは断定しがたく、その包含層位の確定が必要である。



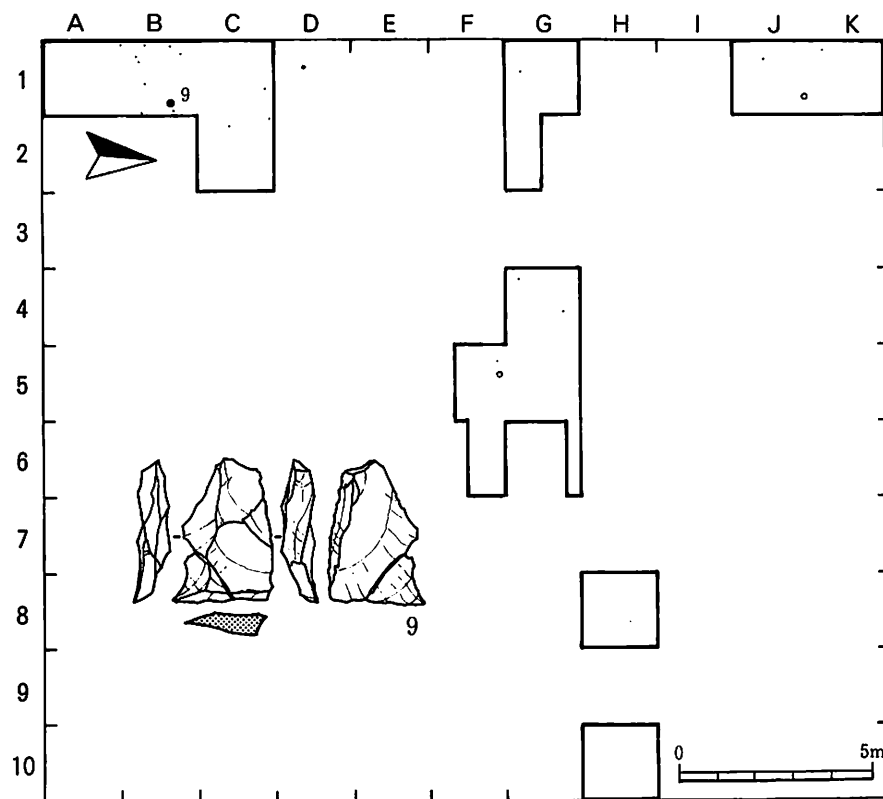
第4図 III層出土遺物分布図及び実測図（遺物S=2/3）



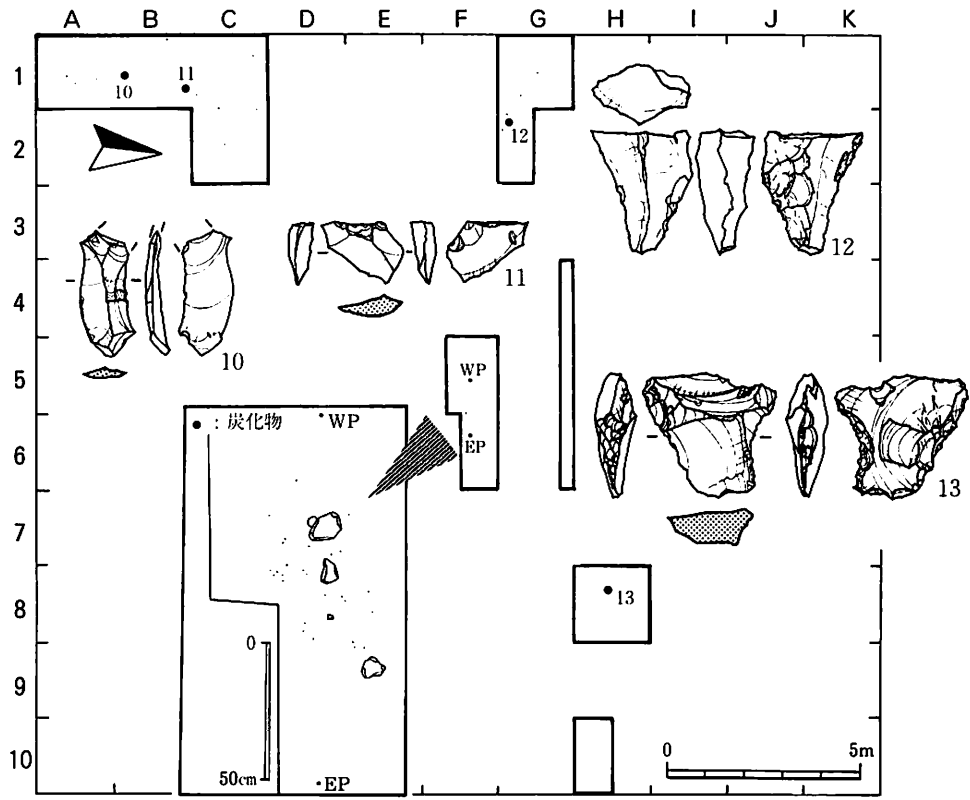
第5図 IV a層出土遺物分布図及び実測図（遺物S=2/3）



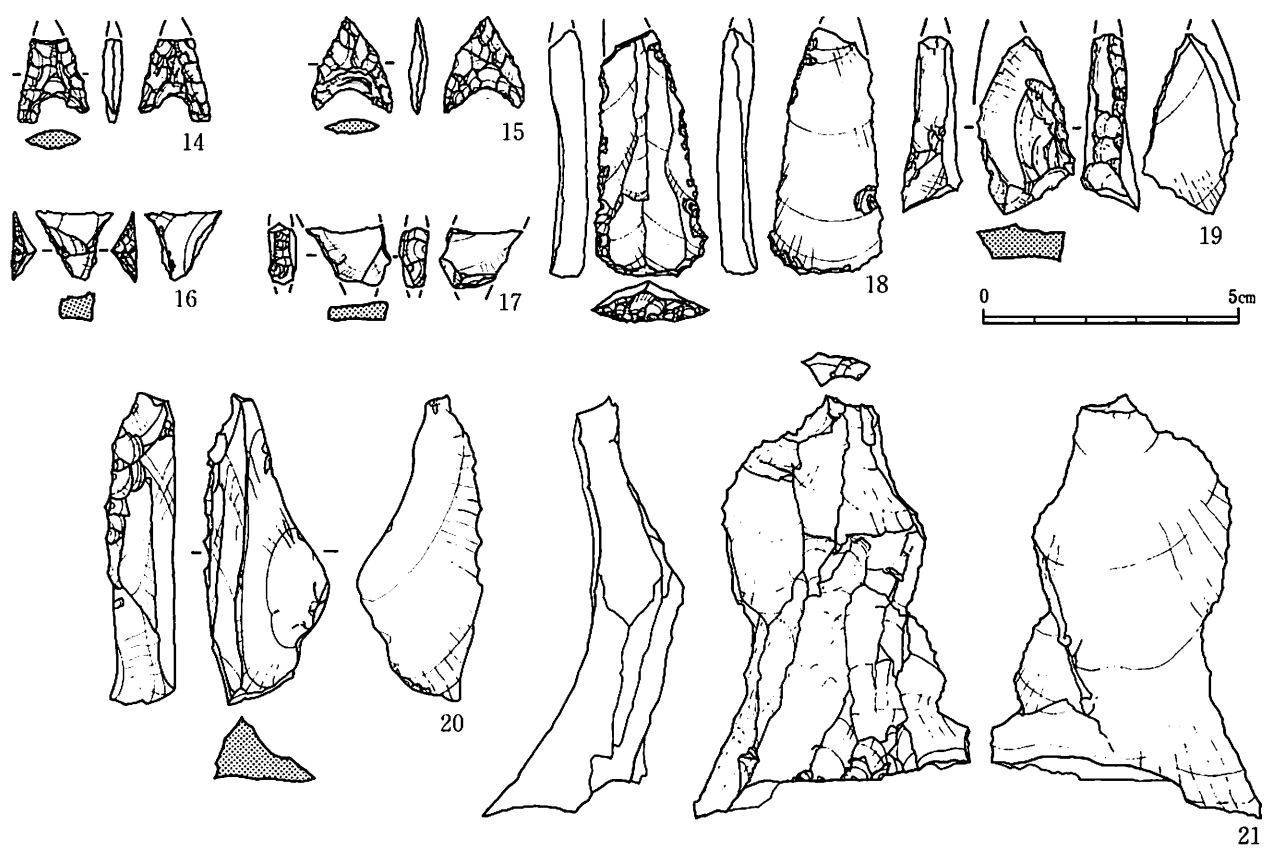
第6図 IVb層出土遺物分布図及び実測図(遺物S=2/3)



第7図 V層出土遺物分布図及び実測図(遺物S=2/3)



第8図 VII・VIII層出土遺物分布図及び実測図（遺物S=2/3）



第9図 表採遺物実測図実測図（遺物S=2/3）

第1表 遺物観察表

図番	種類	層位	フリット	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	備考
①a	剥片	IVa	F-5	30.6	33.8	7.2	5.7	Ch-1	
①b	剥片	IVb	F-4	11.0	11.0	2.8	0.3	Ch-1	
①c	剥片	IVa	G-5	15.2	19.8	2.0	0.5	Ch-1	
②a	台形様石器	IVb	C-1	23.8	33.2	9.0	4.6	Ch-2	96-27-6
②b	剥片	II	G-2	9.8	12.4	4.8	0.4	Ch-2	
③a	剥片	IVa	F-5	15.2	9.6	2.4	0.2	Ch-3	
③b	剥片	IVa	G-5	22.0	27.0	4.0	1.7	Ch-3	96-28-24
④a	剥片	IVa	C-1	34.0	24.2	8.7	4.8	Ch-4	96-27-7 今峠型ナイフ形石器か
④b	調整剥片	IVb	B-1	10.8	8.2	2.8	0.2	Ch-4	
⑤a	剥片	IVa	H-8	23.8	13.7	5.4	1.5	An-1	
⑤b	剥片	IVa	H-8	27.1	23.2	5.8	4.7	An-1	
⑤c	剥片	IVa	H-8	12.4	12.2	6.9	0.7	An-1	
⑤d	剥片	IVa	H-8	11.8	11.0	3.8	≤0.1	An-1	
1	スポール	III	F-6	(14.6)	4.0	3.4	(≤0.1)	Ob-1	
2	台形石器	IVa	A-1	11.8	15.0	3.8	0.5	Ob-2	百花台型台形石器
3	尖頭器	IVa	G-4	(42.0)	24.8	16.0	(13.0)	Ch-5	
4	台形石器	IVb	G-4	13.0	10.0	2.0	0.3	Ob-3	
5	ナイフ形石器	IVb	H-10	(23.0)	12.0	7.0	1.2	An-2	
6	石核	IVb	G-6	-	-	-	13.7	Ch-6	
7	石核	IVb	H-10	-	-	-	26.5	Ob-4	
8	ナイフ形石器	IVb	J-1	62.0	22.2	14.0	20.3	Sh-1	
9	剥片	Va	B-1	28.4	29.2	7.6	2.7	Ch-4	
10	微細剥離を持つ剥片	VIIa	B-1	(24.8)	10.8	4.2	(0.5)	Ob-5	
11	微細剥離を持つ剥片	VIIb	B-1	12.4	16.6	4.2	0.6	Ob-2	
12	-	VIIa	G-2	25.2	20.2	11.0	3.4	Ob-6	台形様石器か
13	台形様石器	VIII	H-8	24.1	26.1	8.2	3.2	Ob-2	
14	石鏃	表探		(16.5)	13.9	3.8	(0.8)	An-3	
15	石鏃	表探		18.2	15.5	3.4	0.6	Sn-2	
16	台形石器	表探		13.0	15.6	4.8	0.6	Ob-2	百花台型台形石器
17	ナイフ形石器	表探		(11.8)	(16.0)	5.6	0.8	Ob-2	
18	エンド・スクレイパー	表探		(48.8)	22.6	8.0	(6.1)	Ob-2	
19	ナイフ形石器	表探		(33.6)	18.5	9.3	5.6	Ob-6	山下実氏採集
20	-	表探		60.8	24.0	13.6	13.4	Sn-2	
21	剥片	表探		82.5	54.1	15.5	61.3	Ch-5	

* 番号は実測図の番号に対応

* 単位：長さ・幅・厚さ=mm、重さ=g

* ()内は現存する中での最大値

* 石材名の詳細は本報告で記す Ob：黒曜石 An：安山岩 Sn：サヌカイト Ch：チャート Sh：頁岩

* 備考…96-27-6：96年度報告第27図6

三 まとめ

調査成果 今回の調査で、石器群は旧地形の平坦面に散漫に分布することが明らかになった。またⅣb層までの掘り残しを完掘し良好な石器群を得、個体別資料の詳細な分析の結果、ナイフ形石器文化期に4枚、細石刃文化期に1枚の文化層を確認した。以下、石器群のまとめと今後の課題を述べたい。

百花台型台形石器 漆黒色黒曜石製の百花台型台形石器(第5図2・第10図16)を発掘ならびに採集によって得た。それらは角状の張り出しを持つことや素材剥片の用い方などの点で、典型的な百花台型台形石器といえる。これまでに出土していた緑色チャート製の百花台型台形石器と時間的に区分する根拠はみいだせず、両者の形態の違いは石材の相違の中で理解したい。また採集資料の剥片(第9図21)は緑色チャート製であり、接合関係は認められないものの百花台型台形石器の素材剥片剥離に伴うと推定される。

A T下位の台形様石器 今回の調査で、新たにH-8グリッドⅧ層中より漆黒色黒曜石製の台形様石器(第8図13)が出土した。その素材は求心状に剥離された不定形剥片であり、調整は背面側から打面を直線状に除去し、対する側縁をノッチ状にする。本資料とは別に、第2次調査でⅧ層中から台形様石器が出土しており、両者の時間的關係が問題となる。しかしA T下位のⅦ・Ⅷ層中出土石器の個体別資料分析では両者を明確に分離できず、今後未掘部分の石器群の様相を把握したうえで両者の時間的關係を検討したい。

石器群の特徴 本遺跡出土ナイフ形石器・細石刃石器群の最大の特徴は、全出土石器の52%を碎片が占め、製品が6%と低率なことである。また個体別資料分析の結果、ナイフ形石器群に以下の特徴を抽出した。

- ①石核を持つ個体は僅少であり、剥片・碎片が大半を占める
- ②判別できた個体の多くが、単独で調査区内に持ち込まれたとは考え難い剥片・碎片で占められる
- ③遠隔地産石材である西北九州産黒曜石の個体の多くが、製品単独である
- ④緑川・球磨川流域産チャート類に代表される在地産石材製の個体のいくつかは、石核・剥片(調整剥片を含む)・製品を確認できる

遺跡の性格 以上の点から本遺跡は、複数の集団の回帰する中で残された、短期間の居留地が重層した結果形成された可能性が高い。

今後、未掘部分のD~Hグリッド周辺に良好な石器群が残されている可能性が高く、それらの把握と総合的な評価が課題となる。(藤木)